

住まいづくりは、まちづくり

——支援付き共生住まい「わがままハウス山吹^{やまぶき}」



季節に合わせた装飾など、地域住民のちょっとした気遣いが暮らしを彩る

住み慣れた地域で暮らし続けたいと願う人は多い。一方、仕事や家族の変化を機に都市部から地方への移住を検討する人も増えている。移住先で人生を豊かに全うするためにどんな福祉が必要か、どんな住まい方が考えられるのか。必要なサービスが地域になれば「みんなでつくる」。山梨県北杜市の一般社団法人「だんだん会」には、そんな精神があふれている。

撮影／葛谷舞子 文／本紙・元木知子



支援付き共生住まい「わがままハウス山吹」。敷地内にはヤマブキが自生する

◆くずたに・まいこ 群馬県生まれ。フォトグラファー。障害の有無にかかわらず安心して撮影できるスタジオ「Photostudio-Home」代表。

八ヶ岳南麓に恋して

山梨県の北西、長野県に接する北杜市は、移住希望者からの人気が高い自然豊かな地方都市だ。一般社団法人「だんだん会」理事長の宮崎和加子さんも、八ヶ岳南麓の自然に魅了されて移住した一人。東京都内で40年近く、訪問看護の仕組みづくりや認知症の人のためのグループホーム開設など、市民が地域で暮らし続けるためのサポートを仕事としてきた。

「山形県出身だからか、山が大好き」とほほえむ宮崎さん。夫の仕事の関係もあり、しばらくは東京と行ったり来たりしながらいずれは定住する先を、元気づけながら探しておこうと思っていた。東京から2時間圏内、空気が澄み、山々をきれいに見渡せる北杜市が、宮崎さんの希望にぴたりと合った。庭先からネギやシソを採ってきて蕎麦を食べる。そんな暮らしを80歳、90歳になっても続けていこうと、退職後に移住した。「一人も知り合いのいない土地に、落下傘のようにポツンとやってきたの」



一般社団法人「だんだん会」理事長、宮崎和加子さん。
法人や事業などの名称は「親しみやすく覚えやすく」を
モットーに、常に「みんなで」話し合って決めると言う

ところが、「調べてみたら北杜市の介護サービスが意外に少なかった」と宮崎さんは打ち明ける。折りしも、市が認知症の人のグループホーム開設事業者を公募した。文句を言っていないでも始まらない。造ってもダメ。東京での経験を生かして、いい中身、徹底した自立支援のグループホームを造ろうと思いました。市の事業に応募するため、宮崎さんは医療、看護、介護、経営と分野ごとの専門家を理事に迎え、だんだん会を設立。看護職が

中心になって運営していくような法人にしようとして一致した。

2016年、だんだん会は選定され、翌年4月、認知症高齢者のグループホーム「わいわい白州」を開所。「地域住民と力を合わせ、地域の保健福祉の向上に寄与したい」という法人の理念に共感してもらえたのか、介護職員が集まってくれた」と宮崎さん。グループホーム開所前の2月には、「地域看護ステーションあんあん」がスタートし、医療ニーズの高い人、終末期の人の自宅療養を支援する体制ができた。

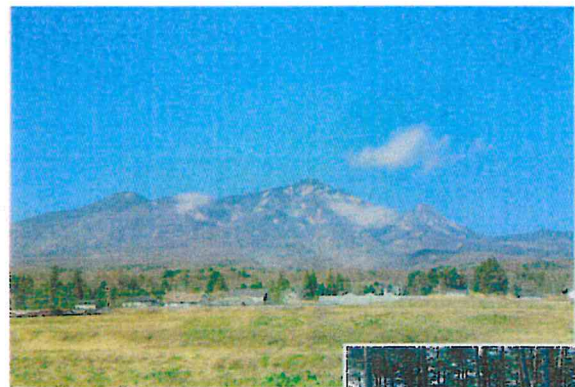
グループホームに続いて、北杜市が定期巡回サービスの公募を始めると、宮崎さんは職員と協議を重ね、赤字覚悟でこれに応じた。1日複数巡回して介護や生活支援をするサービスなしに、高齢者が自宅で暮らし続けることはできないと熟知していたからだ。重度の人、終末期の人も対象にしたいと、トップを看護職が担い、必要に応じて職員を増やしていくことにした。10月、必要最低限の人員で定期巡回サービス「てくてく24」が始まった。

住民参加の住まいづくり

JR小淵沢駅から車で5分、南アルプス・北岳を望む馬術競技場の隣に、だんだん会が運営する「わがままハウス山吹」がある。朝8時から夜8時まで「寄り添いスタッフ」と介護職員の二人が常駐し、超高齢でも、要介護でも、終末期でも、安心して暮らせるシェアハウスだ。

わがままハウス山吹のきっかけをつくったのは、移住者の自主的な集まり「八ヶ岳ふるさと倶楽部」(のち「八ヶ岳根っここの会」)。4、5人のメンバーが助け合って暮らすための勉強会を続ける中、ホームホスピスのようなものを造りたいとの構想が生まれ、その方法を模索していた。その時知り合いの紹介で相談することになったのが宮崎さんだった。

八ヶ岳根っここの会のメンバーの希望は三つあった。まずは、家で終末期を迎える人のホスピスボランティアをすること。二つ目は介護認定の有無にかかわらず集まれるサロンの運営。三つ目は入居者同士の交流がありプライバシーも守れるシ



八ヶ岳南麓の高原地帯。
右奥は赤岳



隣接する山梨県馬術競技場。時折見掛ける馬の姿が入居者の癒やしにもなる

エアハウスを造ること。これらの実現に向け話し合いを重ねたが、資金はない。そこで、国土交通省が改築費の3分の2を補助する事業を探し当て、だんだん会として応募した。「介護施設にはしたくありませんでした。要介護でもどこか弱いところがあっても、共に暮らし合える居場所、シェアハウスにしたかったんです」と宮崎さん。先駆性と実現可能性が認められ、補助金を獲得した。

10人程度の入居者がいなければ経営は成り立たないと考え、地域に増えてきた

空きペンションの中から、現在の建物を選んだ。床暖房を入れ、風呂やトイレをバリアフリーにし、スプリングカラーと室内エレベーターを設置、玄関には車いす用の昇降機を付けた。もともと若者向けに造られていた築30年のペンションは改築費がかさんだ。

一方、八ヶ岳根っここの会のメンバーや地域住民の協力には目を見張るものがあった。庭の手入れをする人、季節に合わせ室内の装飾をする人など、それぞれができることを提供する。寄付金代わりに玄関に大きなステンドグラスを取り付けた人や美術品や工芸品を寄付する人もいた。体が弱っても介護施設へ入所せず暮らせる家、人の声が聞こえ、自分が見たい暮らしができる家、そういうものを造ろうと話し合い、合意してきた強みだ。

見守られ、自由に暮らす

こうして多機能型のシェアハウスが完成、19年4月から入居が始まった。わがままハウス山吹の一番の特徴は入居する人を選ばないこと。一般に介護施設は対



▲「ハケ岳根っこの会」のメンバーや地域住民から寄付された絵画や工芸品



▲「わがままハウス山吹」の魅力について、「みんな仲よし。それから自由です」と答える入居者



▲「一人暮らしを心配していた親せきに安心してもらえました」と話す入居者



▲ペンションをバリアフリーに改築。明るく、落ち着いた雰囲気

象となる人が決まっているが、ここでは夜間の見守りが必要な人を除き、年齢制限も介護認定の必要もない。北杜市の住民票がなくても入居でき、二人で一部屋を使うことも可能だ。「認知症の人もいればそうでない人もいる。激しい性格の人、穏やかな人、その違いがそのまま生活に現れます」と宮崎さん。「それでも

一緒にいられる住まい方は、いわばまちづくり、コミュニティづくりです」

二つ目の特徴は、人との関わり合いが基本にあること。入居者同士の交流を促す家づくりに力を注いでいる。入居者の一番身近にいるのは介護職ではなく、寄り添いスタッフという地域市民だ。「トイレに行ったか」「食事はできたか」と

「延命が第一優先のような社会になっ
てしまったけれど、そんなことはありま
せん。人生の最期に心から関わり、でき
る限りのことをして、ご本人も周りの人
も満ち足りた気持ちになる。みんながハ
ッピーになるお別れ。そういうものが本
当にあるの。そういうふうのできるのよ」

「延命が第一優先のような社会になっ
てしまったけれど、そんなことはありま
せん。人生の最期に心から関わり、でき
る限りのことをして、ご本人も周りの人
も満ち足りた気持ちになる。みんながハ
ッピーになるお別れ。そういうものが本
当にあるの。そういうふうのできるのよ」

居者全員がリビングに集まり、暮らしに
くい点や改善案について話し合う。ペッ
トを飼いたい、漬物を漬けたいなど、話
し合うたびにさまざまな意見が出る。中
には運営法人として実現できないことも
あるが、まず入居者主体で話し合うこと
が大切だと宮崎さんは言う。

たくさんのケアサービスが提供されれ
ば、豊かな老後を暮らせるわけではない。
ただ与えられるだけでは、本当の満足は
得られない。自分がつくる。より良いも
のにしていく。地域市民と共にそうした
実践を生み出していくことが宮崎さんの
テーマだ。

「延命が第一優先のような社会になっ
てしまったけれど、そんなことはありま
せん。人生の最期に心から関わり、でき
る限りのことをして、ご本人も周りの人
も満ち足りた気持ちになる。みんながハ
ッピーになるお別れ。そういうものが本
当にあるの。そういうふうのできるのよ」